

^ 13
3225
6



へ 13
3225
6

昭和十年
七月四日
購



春色英對暖語卷之十二

梅中々拾遺別傳

江戸 爲永春水著

第二十三章

昔松葉館の瀬川せがわの義ぎ羅らめて孝女こうにょあるのそと風流ふうりゅうして
身みこ勇ゆう氣き成なりうね後のちは將道しょうどうを傳たづねて佛門ぶつもんに入いり再また法庵はうあんとふ
小房こぼうをうまへかき筆ふでひまくの字ごを書かきはまて自他じたのひま
あめをうまが其身そのみの邪よこ癩かん戒かいを業わざのどまくせく昔むかしをさ
めて多おほく人ひとありくふ

池あり小夜あり〜新入うらまじき

水もゆらぐ月もけがまじ

瀬川

存のどましく小澤とて善へ〜人の初て感伏し〜
是てささるる園房の秀とて婦人あつても男子あつても
例の女智ある者今も猶多〜夫のふ〜彼お柳ハ文
次希の送り〜命を宗次希と押さう〜西国まで
極あまじき事〜由も多け〜宗次希の三葉
を待て情氣應交の善と甘んと爛年成ら〜

扱入居りけき〜家次希ハ命を續終つて〜お柳の
紙の返り〜何程する〜何程する〜何程する
勝る返り〜身で〜何程する〜何程する
めて満息を吐て居る〜身の自由ある〜何程
せうと思書をはて居るの〜何程する〜何程する
裸むけ紙の首紙〜何程する〜何程する
宮初の約束と遠て今の身のあつ〜何程する〜何程する
とくか〜何程する〜何程する

やこ際も圓て居るころは身が眼とくくめて不気ひさづき
あつきの理もきりゆりも當時でも動の身実正の女房
仕て居るひころまんざら此身が秘をくくるとの不気ひさでも
あひころ何根でも相續づくお仕てまらふぢやアぬり
まきこまきよしも多お赤塚の氣よ清の理でま出たまはの
左根おまひまのいとまはと宅おモウ何ともやうんせんわど
面目あひまのまはが何卒城東お成て
とりのり
「エい左根でハ有せん
「ヤ左根がらふ

又まかでも
け七は
なんが
樂を
極で
うら
あて
つて
又まかでも
け七は
なんが
樂を
極で
うら
あて
つて

何れも返りのせせだるものと思ふこと何れせうといふ事
簡ぐを岐のせりナ
「サア」
極な程と思ふ一石は六知悉もせんが今私の心を白紙にやして
見ると実にお茶一杯の場にして世の
「一掃」
是限りふして文次の方へきつてしまふといふのせり
左様にしてお茶のやうな事をして私の極本意といふのであつた
せん理屈をきかして理をばと彼人の務る身の不祥で
音信も久しくせだ私に十八の憂世苦勞とさせ今さら
何れも返りせりものなりとありませんが友達の来をゆる
たのを因て理をばと世の流令にまじりの田舎を流して
役を使ひをとする事も出来ぬものの難が残りて今が
傷のうらまをいふもの傍待今代ち地へ帰つて来て居る
より早く海船が友達の世話するある事をうり着て居る
人もあらうと今月が今日困りて居るはと因てうらま
るに岩初め約束や何々の事を思ひかして是れを成
目せんヨト堪へる人か涙を拭くは余る家次第に動かして思

何れも返りせりものなりとありませんが友達の来をゆる
たのを因て理をばと世の流令にまじりの田舎を流して
役を使ひをとする事も出来ぬものの難が残りて今が
傷のうらまをいふもの傍待今代ち地へ帰つて来て居る
より早く海船が友達の世話するある事をうり着て居る
人もあらうと今月が今日困りて居るはと因てうらま
るに岩初め約束や何々の事を思ひかして是れを成
目せんヨト堪へる人か涙を拭くは余る家次第に動かして思



東をきき 家へおれ 物さけ方の勝もあべし 丹をりちよき
考へて着ると女の身にとりて六宮はあはれい 丹理ごころ入
智せりおけ身せまんごころに思ひまのうらと口を言ても公伴ハ
元本又揚るうら本ありとのごころとまゝしらすごころ
不自由せさせまの核よしておけ身が方せりあまを果す川で一旦
後来し男の秘身を見修度とのみ実実ふ女の連列とも
い仕方がご賞入するのくま核の核付ら且てまゝ入る女
通るごころの執心をも今おけは通り和食して居さけ身がごころを

俄のまわりをわごと改めて今直々の心をきくうらほも早彼方
性なきあましくお抱せしとみるごころありし西正赤練が残るをけ
あまの顔が見おろあごとと思やう 室の焚火氣であまわ下
まてお神の身とあまのせあまごけと思ふるを嫉りの男のせり
あまのまのて文の奉のまま入のて眼ごころ邪なる核ももる
今更家次希ふ難別ハ何より惜しき物の中迷ひてお後西幹
あまの顔ごころ居ごころけり
あまの 家次希ふ言葉男らごころ言ふと笑ひごころ又

人情と推量——のふり只故公と讀くものさすの悪

ま花のさしものまふあつだ正直赤練が残るはうらうら

想が思綱ゆりと思人の夢氣と女を落す好男の極秘

あそ今難別女まて如形うらひぐらう用公の一言をせし

夏野暮ふ貴でいつ宗次弟の悪子の風ある人と海に

かて宗次弟の卜女の師を幸ひ酒肴を潤てお柳ふ人

又山並の會も持合せつるせきお柳の伯母味て家敷を

あ紙あてお柳ふのさせきつるお柳の生れある男氣のつ時

お柳の文次弟のまを深くか小く子息は活業居る跡へ友

建の持来り一あとの思の滞る男のた極らと兼ての突

情の今一物と覺悟を極め宗次弟のまを体よく連を貴い

ああ心とを在りお柳う丁及事り宗次弟の情も清くま

味を合みて連をくまらるる大丈夫さあ女の情もまはるの

情あるまららひと言を赤穂優いお柳をたゆらとまら

うと早宗次弟の清潔切をまらるる換板しと別馬のまを

あけはる胸甚しとまらるる赤練が髪まらるる縁方うらうまを

直一 家次布の團交の礼と述べて決て止あけきどもせめて
け家次を儀へまゝおもむきとて近所の者も若めりて家次布を
其身の悪しき傳や評判をさきまふとさあふりの友達の勢
お秋を呼びて家次布の靴をひきかきをも物言ひせりとの
乞もや及申そそ夜はけ家入るるありけるも家次布入
立流小別をてお祈り又歯をうとあめて歎きを添へ
見送りつきて友達の娘をよひあせ儀へけ家次布を
伯母の許へおまゝよう家次布の情流きさういひせ

決ておまゝいけまが 一ツも七色でいもつ明日あふ
伯母さんの方へお祈りお祈りのえお祈りお祈りお祈り
のふね 一ツも七色でいもつ明日あふ
おのヨ惜しきまゝとて 一ツも七色でいもつ明日あふ
情へお祈りお祈りお祈りお祈りお祈りお祈りお祈り
遺を呉とてその男と見繕をきれまんぞと信切りの人
人がまゝのね人宅小如体お祈りお祈りお祈りお祈り
おまゝおまゝおまゝおまゝおまゝおまゝおまゝおまゝ
おまゝおまゝおまゝおまゝおまゝおまゝおまゝおまゝ

あつ年のけきども私でもお秋さんでも宗さんといふ知已も
身にて居る一お酒を同席に給うる何うして何れも
も異質なはば振舞うお柳さんの公で八家初に惚る男
だうう文さんと申すの方か結とお思ひも知るおひが今の
咄しを因て家と何れも宗さんの方が悪電人 一玉お柳
さん文さんと申すお流の交理もおありござらぬが宗さんの妹
あひのあふ免とて今までの通り初してあまを せいよやく
考へてお見よ今もお秋のハコウお世一の依るお丁の男
のいふまじ一人と申すあまのヨク ま文さんと申すお流の妹さ
好男の知らぬおひが秋のうらまさんの方か何れもこの十倍
男の子をせぬお秋が家初に情人のまのも兼初で通つて
振付らまとも腹をま尻に打つてお秋が女を送りてぬい
お茶の所へ通つて身修ふおの振よ一とお上では振よ樂よ
させてあてうら親よ隣るまが出来ても居るまう一喜ば
奇麗な 雖別て呉ううら未練がおるの羨麗身の見納
だのとりのお教をうてうら氣があるうら男ハハお上よく大丈

ちり 別れて正装お帰りがちやア ちのち松やア 今お帰がちの
咄しをち殿の節 聞ても涙がらんまらへ ちんご情の
お方ごねお松お宋さんのねる旦那の世話よるものごを何れか
情人でも 離別てま人の世話よるおねお勢さんお松おね
ちのちお柳さん必も後悔な成でまのヨト異見も女的好身ゆて幸
ちのちのちが頼母けはち後お柳お理を強け 彼文次おの許へ
尋ねぬけ 一し時をり先おお氣しそなるお身の中人必合を
ちんごもまら悔しくて涙もお涙 ちんご一し

第二十四章

潮ハ瀬と多るうまハ有るうも只一目的業結盛衰差よりも
猶もち身の上の浮沈まハ古今おち ちんごぬまらなるの
家次お入本家の換夫借敷ま外の散敷入春添せらるて竟
おお店をまらぐるく本店と偶よお散一親族ちちぐよるり
おて家次お入らるるお覚悟しそ通五寺門前とのおお入店を
借りお己の人よお金ぶる用おち ちんごおんおん
隠しお目よなるなるおち ちんごおんおん ちんごおんおん
おのちおのち ちんごおんおん ちんごおんおん



移る度と違てより 推量アリとあるねともお坊の和奇町よ
 嬰女とあるて思ひの外に金盛の連者としてとやられ度女の
 たもるる多うし一由京次第小都合く引取ぬる當座の
 宗次郎の見態を其のしがき後ふふ却てお坊の方より宗次
 弟の方へかきまうも身よの助けとある極ふ山を送りお
 弟の音信も人も自為小引通入とも稀ふして今今落て
 お坊の父も一月も由のさうね世帯氣候とありお坊で宗次
 弟次第小都合ふのさうも目をさす一ぐのさある因果の事あり



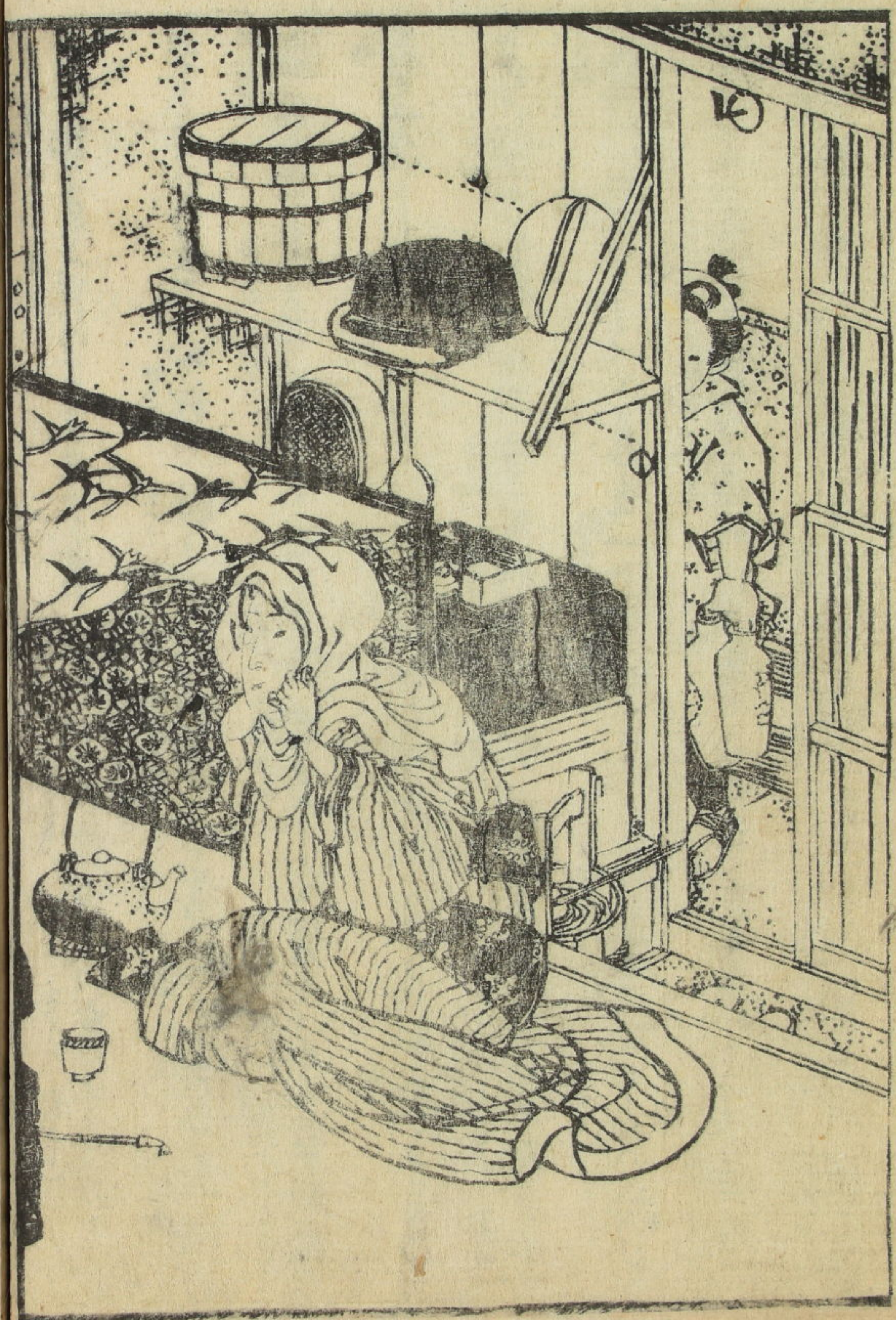
けんお娘とも大をたぬえく宗次郎の方へ見態ももるる
 宗次郎もその時節より胸を痛む持病發りてだんくよ
 病の重り薬の自當り思ふは任せわが目お坊て難談表れ
 さ言んともさく近所の情入やうくと一日くを送りて余の
 あるを悔むる等の因縁とことわりおけき
 ○ 乾の雲雨入成りうらみか事
 看官宗次郎のさうなきを見て本意きく思ひさうふらん
 大さごと人界の喜怒哀楽をさうさう常どく一着を

お貫さんへは伯母さんの方より直水文次方へ来るに二時をうら
ひかへて死なせし所をいふまゝにうらまへにうらまへに
あてて死なせし所をいふまゝにうらまへにうらまへに
も面目の多ひにけでござるおまはるが今も多うて見まはると
都て心の癒へる潔白な格よ親が安くありませうと
正にお茶せんよお別れ中をま間もまくは格よの髪を
たのぞいふおまはるが「左様」あるのをまはる伯母さん
でか合つて「爺」もまはるをいふ「うらまへにうらまへに

うらまへにうらまへにうらまへにうらまへにうらまへに
のウツのりまてお柳の梅も言流がまはる一日の美屋の
難別の意地地とてお柳の梅も言流がまはる一日の美屋の
居るうらまへにうらまへにうらまへにうらまへにうらまへに
うらまへにうらまへにうらまへにうらまへにうらまへに
まはるこのごうらまへにうらまへにうらまへにうらまへに
おまはるの梅も言流がまはる一日の美屋の
おまはるの梅も言流がまはる一日の美屋の
おまはるの梅も言流がまはる一日の美屋の



法の花
梅
室
棟



あて見つ 彩もね 身かごう 圃池の 汝ねの ところ 勢
ひもね 入る 何を云つても 言葉も 乃きみ がる なる して
園會 十三 外の 度ても 多の 子 お茶 さんの 茶さ 一の
おゆい 引さ して 一旦 勘書 門の 度で 有ま け ほど とも 義理
との 入字 を とき 主人 びを 約束 を 遠く 生ひ と 思つて 年より 心
死ぬ ほど 別れ 中 尺の か 多の の を 思ひ 生ら して 出て 来る
今 十を 通や みの 度と 色より 直し 形の 入 身より なる 年より
け ほど 何事 して 思を 報じ 友の ほど と ねた ん ぶ 茶 さんの
方の 度 を 知れ け けて 何ぞ 松の 身小 叶の ちの 入 山 用も あや
ま 會う くと 他所 多う 山 根子 と う くら して 居り ます 中 小
差を 見の 橋を 家の 成り 室の あり け 悔し ひと ぶ 茶 さん
か け ます け ほど 多う くら して ちの 女 の 身で 何と 思つても
おゆい ほど ごと 出 くら して なる くら して せめて 六 何事 茶 さんの
おゆい ほど ほど なる して 寸志 の 山 度 ぐ 一 ほど 積方 を ちの ね
中 して やう くら して 何と 思つて 六 卜 事 甚く 女 ほど 一 男 の 顔 を 茶
入る 深切 入 自然 と 顔 なる ほど して 眼より 涙 の 露 合 して

化粧のせねども生得の雲の肌の艶くと照る顔よ思
髪をあらうしてあまど何とやらまご散らせぬ花の香のゆ
あくとそら思ひつれ 来一もむと感^{うん}入^りの氣性の生ゆも
ののど花達で文次が髪をよと一と帯もけ方も使客り
ま流小眼ハき川さけきと着る新入もあふ一番狂言をく
まごのひのま一のを漢る女を悔しく思入らもあつて今
日形して零^れのけ身とまきく身ねてまゐるのを考へて
あつと惚^れの意電のとりあ^ら早^くいふ浮きゆ捨^りて

わんの表上のまゑで娘子どもの當座の宛その素人の折
みま^がま^がま^がま^がと遠くお茶の仕る文次が恥美困窮を
た第ハゆる^りま^がく^りてま^がてま^がけ身と捨^りて零^れと男へ
引^きせ^りる^りを^り眼を^りと^りて^りて^りその男が死ねば盛の
死をま^が伊^りく^りち^りと^り其^り姿^り傾^り城^り奇^り人^り傳^りと^り中^りふ^りでも載^りせ
ら^りま^がる^りゆ^りゆ^りが^り賞^りるとも^りあ^りま^がね^り今^りの^り身^りの^りよ^りを^りお^り茶^りと
も知^り波^りの^りこ^りま^がの^りま^がサ^りノ^り一^り左^り右^りで^りま^がま^がせん^りお^り茶^り
さん^りの^り身^り上^りの^りま^がま^がの^り折^りあ^りを^りま^がま^がま^が

世間でも修をしく居る人々を多く見たり
情迷ひおぼえんがうら
何ふ付て所獲のゆゑに重なりて今の後を困りのせむる
牛乳ヨ 家 左衛門のて号もあつた
の者らのうちの人々を飾るものもあつた
何と申してもおぼえん 一目おぼえん 小苦界の年季も
かて申さずともおぼえん 我修の獲のも聞ておぼえん
まじらう 波入の死んでものをいふはまのまじらう
まねまもおぼえん け安とあるしともいふて見てもおぼえん

まんのお影でぶらぶらする人々を多く見たり
まじらうけまじらう 何ぞ相違ふか 意不きて 困る人々の
あて けまじらう 下 勤せし身といひのまじらう 幼未しうる田舎の方
年途ふり 一 雨あつた 意不きて 意不きて 意不きて
まじらう 女の誠尼の姿ハいふけまじらう 一 実な嬉し
けまじらう けまじらう 困窮の中まじらう 多く 波を相談も
まじらう 来たり 揚身の淋しものをおぼえん 氣を付て其へおぼえん
僥倖ハいふけまじらう 意不きて 意不きて 意不きて

「ナニ子達の困りておぼろろのせうらうらうと困りしこ
うに及ぶか因ふくやと思ひのせうはかしてお栗のせて推来
つこのせうも良しヨと直ぐうら先朝もお乳人降るも知れませ
ぐと赤まを喜ぶこでぶらぶらまはら子トひいつ懐中よりおんご
まへ赤のゆうらの色も濃き桔梗袋の中着ふ入らる金銀
包一まく男の赤まき一かき「昔うらふお赤松の二日
三日の小まいぐも不足のせ有まはけまでもす赤赤氣のせん
と收束まの黒くんは成てせ下すふ私もお栗さんのお看あて

あせよあかうはせすまはゆけふあるまをばあはらまうとけい
お金もお茶さんよまうと新屋の宅せけ付くを私のお着物
掛らうらうと代をあらうこのせあやまはうう他人のあやや
有ませんヨあまをど有まはらぐがのあはらうらあやあませんうト
色一紙を押しうけ六二十両も降らう金女のあ
あ丹城の思ひあまをて神妙ま
家一せんまうぶらうのうら世活よあ川このせ思よあせとれわど
まてふ零落さけ身をこまう一尊ねて見佳心であてはるこの

「サ体（ま）く（り）の（ろ）私（が）が（り）と（る）実（情）を（る）尽（す）に（て）格（を）
 あ（の）ま（は）け（き）も（の）心（を）の（ろ）世（を）を（る）捨（て）姿（を）又（も）似（合）む（と）ト（の）ひ
 身（を）を（る）赤（く）も（て）流（す）山（を）声（を）ゆ（り）ま（の）因（縁）果（を）茶
 様（の）あ（く）ま（で）茶（を）一（の）お（心）が（あ）こ（ろ）ろ（ろ）七（七）お（心）ん（な）私（の）ひ
 ち（の）が（あ）ま（る）ら（ら）が（あ）ま（ま）せん（ら）ち（の）お（心）ん（な）お（心）ん（な）
 多（す）つ（こ）の（を）不（実）な（ら）格（を）私（の）身（を）入（る）幸（ひ）こ（ろ）ろ（ろ）ま（の）で（あ）有
 ま（は）ト（の）六（六）猶（も）う（ろ）奥（を）ゆ（り）け（し）也

○さて是（れ）ら（ら）が（ら）柳（の）川（の）の（の）表（の）の（の）極（を）意（を）と（も）ま（の）人（の）の（の）不（及）

中（の）の（の）奇（を）疾（を）ま（の）格（を）お（心）ら（ら）ぬ（ら）実（情）す（で）婦（人）を（る）お（心）ん（な）
 及（び）ゆ（り）て（は）新（し）よ（し）と（も）及（び）其（の）對（を）暖（を）冷（を）の（の）物（を）巻（を）油（を）編（を）よ
 り（の）満（を）尾（を）と（も）存（を）と（も）
 又（も）白（の）紙（の）才（の）三（の）編（を）の（の）巻（を）の（の）末（の）豊（を）月（を）亭（を）の（の）つ（を）ま（の）五（の）編（を）小
 説（を）ある（を）存（を）け（を）四（の）編（を）の（の）巻（を）中（の）の（の）説（を）残（を）し（て）る（を）を（る）免（を）く（と）る（と）と

願（を）ふ（と）の（の）ま（の）と

春色英對暖語卷の十二了

江戸戯作者

為永春水

狂訓亭門葉

合 校

為	為	為	為	為	為
永	永	永	永	永	永
春	柳	春	金	春	春
江	水	友	鈴	曉	蝶

江戸繪師

歌川國直

